

「学習材」考

——生徒と「名作」を読む楽しみ——

高等学校の国語の検定教科書の作成にかかわって約三十年ほどになる。読解教材に関しては文学であろうと評論であろうと、選んで持ち寄った百編の候補作から粗選りに残るのは数編、そして全体の構想に従って最終的に選び出されるのは一、二編というところ。筆者、作者は適切か、文章の質的な品格はどうか、量的にいかがか、難易度はなどという幾つもの選定基準に照らし合わせて勘案する。

毎週、或る曜日の夕方から定例会議で話し合い、合計数百編もの候補作と格闘しても、最終的にどこかの席はまだ空いたままになることもある。ただし今、述べているのは読解教材に限った話なのだ。

教材という用語は従来から使われてきた。教える立場、指導者の側から言ったものだ。現在でも使われ続けているが、私は本当は学習材という用語を使いたい。学習する立場、生徒の側から捉えたいからである。そうすると、教科書も学習書、教室も学習室などと言い換えなくてはならない。不思議なことに、学校という名は昔からのもので、教材ではなかった。というわけで、本稿では以下、学習材という用語で統一する。

小林 一仁

また、文学作品と文学教材という用語についても一言、触れておく。簡単に言うと、教科書に収載するには発達段階を配慮したイページ配分を検討したり表現の適否を問題にしたりして、漢字を仮名書きにするとか振り仮名を付けるとか、文章を部分的に採用するとか、卑俗な言い回しを改めるとか、句読点などを検討するとか、いろいろな手当てを施す。これを教材化と称する。つまり、教科書に採録するのにふさわしいように直す。このことから、作家の原作自体をここでは文学作品（ないし作品）、教科書収載のために手当てしたものを文学教材（ないし教材）と呼ぶ。更に、私はここでは教材を学習材という名で扱うこととする。

国語の検定教科書に採用する学習材は、日本全国どこでも使われるのだから、八方、気配りし、どこからつついても突っ込まれないように気配り、中庸を得ていて、かつ正確である必要がある。文学の学習材にしても、著名な作家の作品による場合であろうと、瑕疵を許さないというのが基本原則である。特に差別、身体障害、同和、性、宗教、

政治などの問題に関する配慮が行き届いているかどうかは、人権にかかわり必要となる。

芥川龍之介の「羅生門」（大正四年作）は現在でも高等学校の国語では、どの会社も採録している作品であるが、冒頭「或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。」から末尾「下人の行方は、誰も知らない。」まで主人公「下人」の言動で一貫して書き進められる。この下人は「主人から、暇を出された」とあるように解雇された状態にいる。下人とは「身分の低い者。隸属民。しもべ。平安中期以降、中世までは、主家の雑事に駆使され、相続・売買・譲渡の対象とされた。（以下略）（古語大

辞典、小学館、昭和58年12月第一版）」という身分の者である。教科書としては、下人という身分の者であることは、一応、ひっかかる。そして対役として「檜皮色の着物を着た。背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のやうな老婆」と描写された人物が登場する。この人物描写も気になる。決して気持ちのいい表現ではない。それに材料には「死人」「死骸の頭から奪つた長い抜け毛」「（老婆から）剣ぎとつた檜皮色の着物」などが用いられる。これらは、どうにも薄汚ない。教科書向きの材料としてどうか、というような気もしてくる。

この作品は、学習材としては短編小説であるので学習時

間は短期で済むし、時・所・人物の設定上からも簡潔で理解しやすく、場面分けや事件の推移も捉えやすい。かつ主題は何かなどと言つて読解・鑑賞しつゝ想定すると、互いにいろいろ思いがあつて活発な議論が繰り広げられるので、面白く学習できる。そこで、小説の学習材の一つの典型として取り扱いやすいということなどから、高等学校の国語の指導者に長期にわたり迎え入れられているという経緯がある。そこで各社とも、これをはずしたら、教科書自体の採否にかかわるのであらうと判断して載せ続けていると思われ。

というような事情を顧みなければ、登場人物「下人」は気になるし、題材も暗く、材料も汚ないし、というわけで教室で扱うにはどうかという考えも出てこよう。

この学習材を支持する派の一つの考え方は、これは歴史物であつて、過去の出来事についての創作である。決して現代の人間を扱つたものではなく、現代の世相を描いたものでもない、つまりこの作品は現実とは別の世界のことなのであるから、身分の問題等につき神経質になることはないという考え方も出てくるであらう。しかし、この学習材につき問題とする派は、文学作品は「昔のある所のある人においてのある出来事」を描いてあつても、それは一つの寓意を表すためのものであり、所詮は現代の人間の問題を取り上げ、えぐり出そうとするものではないか、という考

え方を表明することにもなる。

同じ芥川作品「鼻」(大正五年作)は現在、教科書に採用されていない。これは早い話、顔についている鼻、それは「長さは五六寸あって上脣うくもひの上から顎あごの下まで下がつてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はば細長い腸詰めのやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐる」という鼻を材料として取り上げたものだ。かつてはこの作品も短編小説の好「学習材」であつた。

中学生や高校生は折しも青春時代の真只中であり、心理的に繊細で傷つきやすい年頃であること、自分の容貌や姿形などの外見について非常に気にする年代であることなどを配慮すると、教室で取り上げ、皆で読み合う学習材としてふさわしいかという疑念も生じる。というのは現実には、大勢の中には心の訓練が十分でなく、心ない扱いをする者がいて、この小説の読解を契機に、他人の容貌につき露わに口にし、からかいの対象にするということも起こり、取り分け鼻を指して「禅智内供」などとあだ名を付けることも起こりかねない。教室では、指導者の予測もつかないような事態が、指導者の見ていないところでしばしば執拗に、しかも徹底的に追い詰めるようにして起こる。

現在の教育の最も中軸となる目標は、人間として互いに尊重し合う、心を整えて接し合う、言葉遣いも相手を配慮

して選んで言うのど、基本的人權尊重の思想の育成にある。この思想を堅持した態度に則る言動を表すことができるようにするのが、生き方の基本である。ということを基準に学習材を選定すると、いかに名作と言われようと、教室で取り上げることが適切であるかどうかにつき検討の対象としないわけにはいかない。

ピノッキオ(イタリアの作家コッローディの児童文学作品『ピノッキオの冒険』(一八八三)の主人公)の作中に差別的な表現があるゆえに近年、書店から消えたのだが、この操り人形自身の鼻自体にも、問題がなかったとは言えない。

「羅生門」は、自分階級上で下人と呼ばれている人物の、強迫、暴行、強奪、面罵などの全くもって人間としてなすべからざる行為を題材として取り上げた作品である。いかに時代、社会の状況が破綻し乱れた状況にあらうとも、現実、実際の人間の行為としては決して許されはしないことが描かれている。「羅生門」も「鼻」も芥川龍之介の初期の名作として、幾ら言われていても、である。

いや、ここに書かれていることを通して、人間いかにあるべきか生きるべきかを学ぶ必要があるという、いわば人間探究派の、堅く言えば道徳派の発言もありうる。もっと言えば、人間は状況に応じてどうなるかは分からないという諦観派の発言もありうる。文学作品は読んで楽しめばいい

いのだという楽観的な享楽派もいよう。というように、それぞれの思いを誘い出し、人間につき思いを致すこととなる、それが大切という考え方は、文学作品を学習材として取り上げる場合には常につきまとう。所詮、小説は人間の内面の、或る状況下の心の奥の、他人には見せられない、或る何かをえぐり出すものだから、というところがあ
るからだ。

志賀直哉「清兵衛と瓢箪」(大正二年作)も短編小説ではあるが、なかなかよみごたえがある。視点を限れば、私にはその時代の教育的な事情も分かり、面白い。

清兵衛は十二歳で小学生。「彼はそれから、その瓢箪が離れなくなった。学校へも持つて行くやうになつた。仕舞には時間中でも机の下でそれを磨いてゐる事があつた。それを受持の教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員は一層怒つた。」

趣味がある、楽しみを持つ、物を見る眼がある、生き甲斐があるなどというのは、すばらしいことだ。

ところで、その教員は「武士道を云ふ事の好きな男で、雲右衛門が来れば、いつもは通りぬけるさへ恐れてゐる新地の芝居小屋に四日の興行を三日聴きに行く位だから、生徒が運動場でそれを唄ふ事にはそれ程怒らなかつたが、」
というわけで、何たる俗物と思うこととなる人物設定。そ

こで「清兵衛の瓢箪では声を震はして怒つたのである。」
ということになる。清兵衛の気持ちに入つていけないのだ。
分かつてないね、と思わせる仕組み。

しかも、その教員は清兵衛に対して「到底将来見込のある人間ではない」とまで言う。この一言は、当時の教育がどのような人間を育成しようとしているかに拠っている。すなわち、国家に奉公する、忠孝の精神を体現できる、教育勅語に表されている人間像に我が身も心も重ね合わせる、
ということだ。

この教育理念は、学校教育から家庭教育へと及ぶ。その教員は、家にやってくる母親に「かう云ふ事は全体家庭で取り締つて頂くべきで」と食つてかかる。清兵衛の母親は泣き出す。そして仕事場から帰ってきた父親は「急に側にゐた清兵衛を捕へて散々に撲りつけた。清兵衛はこども『将来迎も見込のない奴だ』と云はれた。「もう貴様のやうな奴は出ていけ」と云はれた。」という次第である。

その後、「教員は清兵衛から取り上げた瓢箪を穢れた物でもあるかのやうに、捨てるやうに、年寄つた学校の小使にやつて了つた。」そして、小使は骨董屋にそれを売る。掛け引きの末、五十円で売る。五十円とは「小使は教員から其人の四ヶ月分の月給を只貰つたやうな幸福を心ひそかに喜んだ。」というほどの金額だ。この瓢箪は実は、もっと
価値があつたのだが。

清兵衛は散々に扱われたことになるが、作品の終わりに「清兵衛は今、絵を描く事に熱中してゐる。」とあり、やや救われるのであるが、そこが名作、締め括りは「然し彼の父はもうそろそろ彼の絵を描く事にも叱事を言ひ出して来た。」と。人生、そうはね、という展開となるのが、読みたえあり、である。

この作品を読み進めながら、時代的社会的な背景を知識的にも加えて味わい、また主人公清兵衛を一人の個性ある人間の象徴として置き、これをめぐり学校の先生と小使、家庭の父親、母親などの見方、考え方、行動などを配すると、逼塞への状況が簡潔、的確に鮮明にあぶり出される。なのに、この作品は中学校の国語の教科書にも高等学校の国語の教科書にも現れない。それは今日の目で見ると、「小使」という差別語があるからである。

同じく志賀直哉「出来事」(大正二年作)も、短編小説として傑作。だが、大方の教科書会社は検討の末、採録をためらう。それは「子供のくびれたものもに挟まつてゐる五分瓢程の奇麗な似指の先はまだ湿つて居た。」という描写があるからだ。教科書は、教室に男子生徒と女子生徒と共学で扱う場合もあり、若い未婚の女性の指導者が男子生徒ばかりの授業を担当する場合もあるであらうと慮ると、まあ他にも名作はあるから、そちらに、という話になる。

ところで、某社はこの作品を高等学校の国語の教科書に採用した。その編集メンバーを見て、私はああ、この人がいるからだなと思つた。周りをじろりと見る、声の大きい人だ。

芥川龍之介「奉教人の死」(大正七年作)も採用したい作品だった。そのクライマックスは、猛火の中から幼子を救つた「ろおれんぞ」の姿を描き、「横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣のひまから、清らかな二つの乳房が、玉のやうに露れて居るではないか。」と。

教室という場の雰囲気作り方、生徒集団の感性、感情の在り方など、さまざまに配慮して、採録は見合わせることもなつた。

もっとも、これより先に、宗教についてと、追われたるおれんぞが「打つて變つて、町はずれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。」という箇所のあることが、最も問題となつたのだが。

夏目漱石「坊っちゃん」(明治三十九年作)にしても、少し読み進んで「清」に及ぶと、「十年来召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて」とある。当時の社会的な風習から言えば、そうであつたからその言葉をそのまま使つたまでのことだということになるのであるが、教科書はそれを載せることによつて問題を起こしてしまう

という一面がある。清について「十年來働いてくれている清さんというお手伝いの方が」などと書き変えて済ませるものでもない。

小学校の国語で教材とする物語や民話は、人間性、人格の育成を目指して、どれを読んでも道徳的であり、何らかの教訓を与えてくれる。そこで、小学生は物語類はこのような視点から読むもののように心得てしまう。少なくとも教室で読む国語の教科書に掲載されている学習材は、ということになる。そういう読み方の習慣が中学校段階、高等学校段階にまで及ぶとしたら、小説の読み方を狹隘に押しやうことになる。あるいは、そういう読み方で小説が読まれ続けたら、小説の方でよしてくれ、ということになる。芥川龍之介の「羅生門」にせよ「鼻」にせよ、そういう道徳的、教訓的な読み方、きれいごとからは遠く、人間の切なく遣る瀬なく、隠しおおすことができるのならそうしてしまいたい自分の中の在る何かが、露わにされている。それに中学生や高校生は、もう一人前の大人の心情を、それもエキセントリックに持っている者もいるがゆえに、そのような者にとっては、余りに道徳的な意味合いを荷わせられた学習材が次々と登場したら反発を感じそっぽを向くことにもなる。人間の中に潜む、他人に知られたくない心情や性向、生き方などについて取り上げ、分析し、描

写し叙述してあるものをこそ、となる。

中島敦「山月記」(昭和十七年発表)、森鷗外「舞姫」(明治二十三年発表)がともに芥川龍之介「羅生門」同様に、高等学校の国語の、いわゆる「共通教材」として命脈を保っているのは、そういった意味合いが強いからである。これら三作とも、使用語彙や表現は難度が高く、すべての高校生に理解を十分に及ぼしていくには、相当に苦勞するであろうと思われるのだが。

文学作品はその時代、社会の中にあって産み出されるのであるから、その条件を配慮した扱いをすることが必要となる。何でも彼でも、現今の時代的な正義観、道徳観、人間の育成の規範をもって律するというのは、よろしいのか、という考え方も生じる。

たとい「羅生門」の設定は平安時代、乱れに乱れた世の中、場所は都のはずれ羅生門、主人公は下人というように具体的になされていようと、作品に表されている下人の言動、心情は、もはや下人のそれを超えた人間一般のそれ、ということである。作者により創出された想像の世界は、そこに表された限りでの具体的世界であり特殊であると同時に、超えて抽象の、一般的、普遍的な人間の生き方、考え方などのエッセンスを表し出しているものである。「下人」という語一つで、作品を葬ることはできるか、ということ

になる。「小使」という語が出てくるからといって、その作品を消してしまってもいいか、ということになる。

閑話休題。小学校の物語の学習材の一つに新美南吉「ごんぎつね」（四年生向け）がある。この物語は、小狐「ごん」の気持ちの変化を追って進む。小学校の在る先生は、てんからこの物語を小狐の話として読み教え、学習させていた。物語を、まるごと人間の何かの比喩として想像を楽しむということを知らないのだ。驚いたね。本物の狐の、生物としての狐の生態の観察記録とでも思っていたのかしら。いや、そうは思っていないかったのだろうけれども、ね。

名作、井伏鱒二「山椒魚」（大正十二年発表）が危ない。文章中に「発狂」とか「瘋癲病者」とか「莫迦^{はが}」とかの言葉が出てくるから。

名作、宮沢賢治「よだかの星」が危ない。「よだかは、実にみにくい鳥です。」といい、「ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまふといふ^{ぐあひ}工合^{あつ}でした。」とある、これはまさに、いじめ、しかと、つまはじき、仲間はずれ、一人ぼっち、孤独、自殺などという話なのだから。

「山椒魚」も「よだかの魚」も「羅生門」同様、今はまだ、いずれかの教科書に載ってはいる。指導者側での慎

重な配慮や学習者側でのそれぞれの謙虚な真摯な受容が成り立たないと、道を誤る虞がある。

名作、宮沢賢治「^{げんじつ}度十公園林」は教科書の学習材としては登場しない。なにせ主人公は、皆から馬鹿にされ、「あんまり子供らが度十をばかにしては笑うものですから、度十はだんだん笑わないふりをするようになりました。」などと描かれる人物設定ゆえに。これは、自画像ともいわれる話。その造林が、後の人々への喜びを生み出す話。

教科書は日本全国で規範の書として遇されるがゆえに十全の配慮をし、中庸と正確などを目指して作成される。それゆえに、国語の教科書に載せたくとも遠慮せざるを得ず、見送る名作も数々、ある。

学校教育で、人権尊重の思想を軸とし、人間の不条理などを学習者と理解を進めるには、問題が多少ともあるために登場してこなかった数々の名作をも取り上げ、指導者の側で客観的にきちんとした解説などを加えた上で、作品の表現に即して、生徒の感情、感性、情操、感覚といった情念の中で喜怒哀楽などを具体的にかみしめつつ、人間のかなしき、他人の痛みとの共有、孤独と共存などを感受、体得できるように図りたい。

読み聞かせ、部分音読と粗筋紹介、絵本やビデオの視聴など、手を尽くしたい。（93・2・14 茨城大学）